

## 調査報告

### 鬼師の世界

——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)——

The World of Ogre-tile Makers

—“Kuroji” as Fired Tiles: the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro Line (3)—

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp*

#### Abstract

This article is the last part of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line in Takahama, Japan. The main description is written on “Onisaku” as one of the members of the Iwatsuki Sentaro line. However, at the end of the article I referred to the main contribution of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line to ogre-tile making, which was an introduction of a plaster mold into the world of ogre-tile makers. I would like to add the second contribution of this line. It is a publication of general catalogue of ogre-tiles in Sanshu in the year of 2000. As there was no general catalogue before the publication except individual catalogues of Oniitayas : a workshop of ogre-tiles, it was almost impossible to get an idea of the whole picture of ogre-tiles in Sanshu. After the publication of the catalogue, people particularly customers of Oniitayas, could start to order any items in the catalogue. As a result, every ogre-tile maker began to cooperate with each other much more than before because one ogre-tile maker cannot produce everything in the catalogue. This change would stimulate an activation of the world of ogre-tile makers. Finally, for the purpose of getting a whole picture of the Iwatsuki Sentaro line, it is better to read three divided parts at once from the beginning because these three articles were originally written as one article.

#### 鬼作

鬼仙と深い繋がりを持つ鬼板屋が杉浦作次郎の興した「鬼作」である。現在の鬼作の住所は鬼仙と同じ春日町である。その理由は、その昔、鬼仙の地所は今と比べるとかなり広く、鬼作の土地も元々は鬼仙に由来しているからである。また、作次郎の母（マリ）の妹（カズ）

が鬼仙の元祖にあたる岩月仙太郎に嫁いでおり、作次郎はある意味で鬼板屋になる星のもとに生まれてきたと言えよう。作次郎は明治29年（1896）に今の半田市（乙川町）にあった米屋に生まれた。作次郎は高等小学校を出て、西尾にあった呉服屋で小僧になっている。ところがこの仕事が性に合わず、逃げ出している。結果、叔父の岩月仙太郎が作次郎をあずかり、鬼仙で鬼板師にさせるために小僧として仕込むことになる。作次郎の息子の博男はその頃の作次郎について話してくれた。

「作は、あいつは頭もええし、腕もええで、あいつは一人前の立派な職人になるぞー」「俺の甥でがなー、あいつをまた、一生懸命に目え掛けて、商売やらして」ってって一生懸命やっとならしただ。ほいで、まあ仕方ねえ、叔父御のとこだもんだん。ほいだもんだん、まあしょうがねーもんだ。まあそうやって、例えば逃げて行くこともできんもんだん。まあ何とかかんとか、一生懸命で同じ職人さんらと働いとったわけだ。あん時に、「小僧が4、5人居った」って言ったなあ。そんなじゃあ、一番腕が良くて、ほりゃー、「作はずば抜けて腕が良いわー、あいつは」ってって、そう言っとったけんど。昔の頃にね。

ところが作次郎は3年間が過ぎて、職人になる前に、無断で瀬戸窯業学校へ行き、入学試験を受けている。作次郎の性向は勉強がしたくて仕方がないタイプだったらしく、二度目の小僧の時は年が明ける前に、鬼仙を飛び出している。当時、瀬戸窯業学校は学生が全国から集まってくる窯業の名門校であった。作次郎は50人中3番で合格している。二度に渡る小僧逃亡は作次郎の強い向学心を表す象徴的な事件であった。ただ、二度目の鬼仙での小僧生活は作次郎を後に鬼板師の世界へ導くことになる。

入学試験合格後、作次郎は運良く瀬戸で保証人を見つけ、新聞配達、牛乳配達などをしながら苦学生となり、頑張り抜いている。勉強好きの負けず嫌いで、学校では1、2番を争う優秀な学生だったという。博男は次のように話している。

日なか、働くっていうのか、学校が済んだ後、直ぐ待ってって、夕刊配らなあかん、朝刊は配らにやあかんねー。朝の牛乳は配るってな事で、ほとんど寝とる時間ありやへんもんだん、学校来ちゃー、まあ眠たくて、クラクラー、クラクラー、授業中よう眠ってって、校長先生によろ叱られたってってー。

ほいで「どういう事だ」ってってー。「ほうか、杉浦、そいじゃーいかん」って、「若いもんがいくらなんだって、ほいじゃーお前、病気になっちゃう」って。「俺ンとこへ来い」ってってー、校長先生の下宿へ。あの、あれだねえ、書生だわねえ。

作次郎は黒田校長に目を掛けて貰い、面倒見て貰いながら、優秀な成績で卒業している。作次郎は鬼仙で小僧を3年既にしていたので、歳がいており、卒業すると同時に徴兵検査を受けざるを得なかったという。作次郎は名古屋の部隊にまわされ、学生から一転して、兵隊になっている。丁度その頃、ロシアに共産党革命が起こり、日本はシベリア出兵をし、作次郎は兵役を終えるまでの1年から2年をシベリアで過ごしたのである。ここでも作次郎の優秀さが認められ、經理に回されることになり、兵隊としての仕事から免除されていたらしい。作次郎は軍人になることを薦められるが、窯業への想いが強く、自ら除隊している。

日本へ戻った作次郎は京都府立工業高校窯業科を目指す。しかし、作次郎が期待していた軍からの一時金が入らず、入学を見送ることになり、結局、瀬戸窯業学校へ呼び戻され、母校の黒田校長の助手となって研究と講義を手伝うのである。作次郎はこのように、一時軍隊での中断はあるものの、研究者肌、学者肌の人であった。瀬戸窯業学校で軌道に乗りかけた頃、広島県の大野に宮島耐火という煉瓦工場が出来、其処に、アメリカ帰りの優秀な技師がいるという話が作次郎のもとへ届く。校長から作次郎に宮島耐火へ行くことを薦められる。作次郎は先端技術を見たいが為に其処へ入るが、二ヶ月して、その技師が他へ引き抜かれ、後任として作次郎が技師長になったのであった。作次郎が26、7の頃、さらに結婚の話が叔父の岩月仙太郎から舞い込み、仙太郎の娘、キンと一緒にいる。作次郎とキンは互いに従兄弟に当たり、作次郎は鬼仙との関係をさらに深くすることになったのである。キンは広島へ一人に来て、後に二代目鬼作の博男が生まれることになる。博男は次のように話している。

私は、大正15年、西暦でいいますと、1926年の7月29日に生まれまして、生まれた所は広島県です。大野町という処で生まれましてね。でまあ、厳島のちょうど対岸になりますけど。で、父親がねえ、今はないんですけど、その当時に耐火煉瓦の工場がありまして、そこでまあ、責任者みたいなことをして生活しております。

初めは順調にいったんですけど、第一次世界大戦が済んで、やっぱし、戦争の時は、ああいう、軍事工場というのか、世の中の景気は良くて、それで戦争が済んでしまおうとその反動でね、今まで使っておった耐火煉瓦もいらんようになって。いっぺんに、クシャンと潰されちゃった訳だんね。

宮島耐火の倒産によって、作次郎の人生が大きく転換する。この時に、叔父の仙太郎が作次郎を高浜へ呼び寄せ、地所を譲り、工場を建て、作次郎は白地屋になるのである。博男が6歳の頃だったという。昭和6年頃の出来事である。それから2、3年して窯を築き、鬼板屋として独立し『鬼作』が誕生する。作次郎が37歳頃のことだと思われる。作次郎は仙太郎から顧客を2、3軒分けて貰うと、自ら仕事に打ち込むことになった。(第1図及び第2図参照)



第1図  
初代鬼作 杉浦作次郎 (写真中央)



第2図  
獅子飾り瓦 杉浦作次郎作

ああいう人なもんで、一生懸命でやって、伊勢の方へ、三重県から滋賀県から、ずーっと。ほいで、東の方から、もうしょっちゅう、営業を兼ねて……ほいで、どんどんどんお得意さんふやらかして行ってねえ。それで、あれが昭和14、5年の頃かねえ。「まあ、鬼作さん、作さんすごいわ。まあ、あれだけお得意さんを作って」って。どんどんどんねえ。みんな「売れやへん、売れやへん」って言っとった時にも。

作次郎は鬼師の世界に大きな貢献を残している。石膏型の鬼瓦の技術は第二代鬼源の神谷勝義によって、関東大震災のあった大正12年(1923)に考案されている。それに対して作次郎は新しい石膏型の技術を導入している。どういう物かという、「一つ型」という、一つで全部スコットと一度に抜ける型を勘考して作ったのである。一方、勝義の考案したのは「丸形」といい、全体の大きな部分を型で抜いて、部分的に雲なら雲の型、波なら波の型、台なら台の型と幾つかに分けて、作る型であった。作次郎が広島から高浜へ戻り、昭和8年に「鬼作」を始める前の白地屋の時、昭和6年頃に新しい石膏型である「一つ型」を考案したのである。これによって鬼作の<sup>のち</sup>後に続く、得意先の急速な拡張の秘密が理解できるのである。別の言葉で表現すると、作次郎は鬼仙で十代の頃、小僧として学んだ3年間以降、鬼板師とし

て長い空白期間を持つ。そのハンディーを新しい「一つ型」という石膏型技術の開発によって克服し、その乗り越えに成功したのである。

作次郎が鬼作を軌道に乗せ、順調に経営をしていた時に、再度、戦争（大東亜戦争）が始まるのであった。昭和15、6年頃のことである。鬼作で働いていた者が次々に召集されて行ってしまったのである。召集されたのは鬼作の職人だけでなく、作次郎の息子の博男もそのうちの一人である。

博男は当時、まだ学生であった。旧制刈谷中学5年生の時に志願の要請があったという。海軍を受けて合格している。目が悪かったので衛生兵になっている。広島にあった衛生学校専修科に入って、軍医学校を目指していた頃に、原爆が広島に落とされ、全て御破算になったという。学校が広島から10キロほど離れた山の中にあり、博男は「原爆を見た」と言っている。その博男が戦争期の瓦業界の様子を語っている。

昭和16年、17年の頃は軍隊の、もう、軍隊のあれだわね、瓦を、どんどん、どんどん作らせた。兵隊をよけい作らにゃいかんでということ。そいでん、こら辺でも、中部2部隊とか8部隊とか18部隊とかそこら中にね。その、「日本を防衛するために」って言って。もう、どんどん、どんどん、徴兵、徴兵で軍隊作ったでしょ。ほうすつと、その兵舎が要るわけ。だから兵舎を造るにだね、瓦は要る、鬼は要るってことでね。ほいで、一頃ものすごい忙しかったの。(昭和)17年、18年頃かね。

ほりゃ、作ったら、作っただけ、「まんだできんか、まんだできんか」って、どんどこ、どんどこ。それがねえ、あんた、東京の方だ、大阪の方だ、地元、名古屋はもちろんの事ね、全国へ三州の瓦っていうのが出たわけだ。

だから有頂天になっとなら、もう今度は戦争でどんどん、どんどん空襲になるでしょ。ほうすつと、まあ、家はまあ、一軒も建ちゃへんわさ。ほうすつと、瓦も作っとなら、まあ、売れやへんだわね。一枚もね。で、作る若い衆や職人とかは全部兵隊に皆引っ張られて、皆徴兵に引っ張られて。だから、終戦の直後やなんか、瓦屋は殆どなかった。鬼屋さん、一番勢力のええ時は鬼が40何軒あっただ、あの組合で、40何軒の鬼専門の。で、瓦屋がね、300軒ぐらいあった。軒数は多かった。その代わり昔のあの、あれだもんで、小さいね。

作次郎の第一次鬼作が戦争によって終わることになる。第二次鬼作は終戦後から開始される。その時に参加するのが兵隊から帰ってきた博男であった。

博男は昭和20年（1945）9月1日か2日頃、高浜に帰って来ている。帰る時、当時切符自体がなく、自ら切符を作って汽車に乗り戻ったのである。

あんた、切符はありゃへんだもんでね。どういう切符くれたって言うかね、まあ、「自分で切符作れ」って言うだ。ほんだもんだい。私たちはね、西条っていう処から乗っただねえ。今は、あー、エーと、東大阪市だけどね。西条発、それから「自分の好きな最寄りの駅の名前を書け」って。どういう風に行ってええで。だからわしら等は、あれだわねえ、名鉄三河高浜駅ってこう自分の所書いて、それはどうだって言うとなにか「国鉄があるところは国鉄へ乗れ」って。それから「国鉄がなきゃ、私鉄でもバスでも、とにかく動いとるとこ何でもええで、交通機関をさがいて、ほんで自分のうち、うちまでたどりつけ」って。そういう切符だもん。回りまわりゃー、北海道までまわってつてもええって事だわ。出発点は書いてあるよ。ほいで後はおまえん等の自分の好きなとこ書けだもん。ほいで、乾パンを一週間分くらい切って食料くれて、ほいで帰って来ただけどねえ。

博男は帰って来てもやることがないので、闇屋をやっていたという。

東京の方へこちらのもんを、芋を持って行って、夜行で行って、向こうで、あれだね、新橋やあの辺りで広げては「買え、買え」って言って、闇屋でパーツとやってほいで帰りに、また、あの、東京で買って来て、ほいでこっちでまた、米と交換せる。そういう事を、半年、半年近くやったかなあ。

そうしている処へ、昔の間屋さん等が、「鬼作さん、まあええかげんに商売やれよ」ってって。「鬼板を作れよ」ってって一という事が度々あり、作次郎と博男は鬼作を再開するのである。戦争後の鬼瓦屋の様子が博男の次の話に生き生きと描写されている。

名古屋でも何十万户って焼けちゃっただもんね。ほいから、またこの周辺の岡崎から一宮からとにかく豊橋から、もう、焼け野原だもん。愛知県だけでも、もう何百万戸だもんね。「百万も二百万個も作らにゃいかんじゃないか」って。「なあ、瓦なんかは、もう、どんだけ作っても足らんぞー」って。「まあ、何時までもほんなー、遊んどってくれちゃあ困る」って言って。「お前んとこ窯作ってくれにゃー、まあ、俺ん等商売やれやへんで」って。ほんで、「やれやれ」ってって一。そこら中から言われたもんだん。

ほいじゃー、まあ、「こんな闇屋やっつてもいかんで」って、「やるかん」ってって。

ほいで、親父さんと2人で、あんたな一、窯を修繕してな、うん、2年も3年もほかったもんだん。ほいでそれをまた、一生懸命で直いて、ほいで、炊くもんがありゃへんもんだん。ほいで、それらの廃材って言うのかねえ、うちを壊いた廃材を持って来て貰ったり、買ったりね。そういう物を。ほいで、松葉、松葉だとかほげなもんをくべれる物を何でも集めてきてくべて。ほんだもんだん。もう、あー、隅から隅まで焼けんわなあ。

そんな完全に焼けとる、まあ、何でもかんでも、ま、ほんなんあれだわあ。「色さえ付けばええわ」ってな事で。「何、溶けな一ええわ」ってな。そげなようなもんを、ほんと今から考えるとようあんな物をよう出荷したって思うようなことを。みんな、ほんだもんで、ほんでいいだ。ほんで、問屋の方も、「ああ、こいで結構結構、こいでええだ。とにかく雨が漏らにゃいいだ一」って。ほいだもんで、淡路やなんかへどんどん作って。淡路の瓦なんか、ほうて一とみんな、あれ、あれだもんなあ、屋根板腐っちゃって。て言うのは、もう、みんなもう、漏うっちゃう。うん、あそこら辺の砂地の砂系の、あの一、瓦だもんだんね。通しちゃうじゃんね。そこ行くと、まんだ三河の粘土が良いもんだん、其処まではいかん。その代わり寒いっていうと、パーッと凍てちゃうでね一。ほいで、それを、「怖かった」って、よう、言っただよ一。

とりわけ鬼瓦を焼く燃料の獲得に、終戦後暫く瓦屋は大変苦労したようである。

あの頃は、そりゃあ焼かあと思っても焼く石炭もありゃへんし、もう油ありゃへん。もうそこらの廃材だわあ。廃材や、ほいで家を壊いた木っ端だとかねえ。ほいから、製材、あの頃は家が建つっていえば、製材でねえ。だからねえ、鉋屑と、おがくずだねえ。かんなど、おが粉、ほうから、まあ、家を建て一時の、まあ、あの切れっ端だね。それから家を壊いた古い壊いたやつとか、ほんから火事になって半焦げになったやつとか。皆、どンドン、どンドン持って来て、ほいつをみんなくべて、やっと思ったわ一。

博男は第二次鬼作の開始と共に鬼瓦の修行に入る。その修行の様子を博男は語ってくれた。

学校卒業して、終戦から兵隊から帰ってきてから（昭和）22年ぐらいから親父さんと一緒に、コツコツ教えて貰いながら絞られてやってきたわけだ。まんだ、おらんとは、兵隊から帰って来て20歳の時から50年間、へらを舐めくって、機械も何もない時にみんな手で作っただね。見よう見真似で。古い物持ってきて、ああ、こうやるか、ああやるかって。ほいで先輩にだね、親父さんやお爺さんに仕込まれて、「こんな事やっとなあいか

んじゃねえか」と。「ここはこうやって作るだ、ああやって作るだ」と。へらの使い方から何から全部教えて貰って泣きながら修行してきたと。

博男は鬼板師の修行の仕方についてさらに話してくれた。

始めね、「こうやってやるだー、やってやるだ」ってってねえ、一つ、シャーシャーってやってくれるだけの事でね。ほいで、後は見よう見真似でねえ。

ほいで、一緒に働いとる人間がねえ、自分が、とにかく先輩、一人前の人ら等がそういう人らのやるやつを、チラッチラッと横で見ながら、ほいでやってー、ほいで、そうしてもわからんところは、「おっとつあーん、ここがどうしてもできやーへんけど、どうしてやるだい」ってーと言うと来て、「うん、ここかー、ここはなー、こんな事やとっっちゃーあかんぞー。ここはこうしてやるだあー、ああしてやるだー」ってチョッチョッと直してくれるだけ。

昔はくどいこと言わだったねえ。ほんとにくどいこと言わん。職人でも、ほうだもんねえ。とにかくねえ、「人の技を盗め」だもん。

博男は「人の技を盗む」逸話を教えてくれた。

高浜って所はねえ、「あそこのねえ、あそこのお宮にねえ、ええ鬼が出来たげなあ。あそこの家はものすごい」、学校やなんかでもねえ、「菊水のものすごいええ物が出来た」ってっていうとねー。夜の夜中にねえ、職人がコソコソッと行ってねえ、肝心なねえ、菊の葉っぱだとかねえ、波やなんかをねえ、チョンとこうやってわかんないように削ってもってっちゃう。ほうしで、これはどうして作っただなあ。あの職人はどうやって作りよったかなあ。ほんであんた、あの一、見て。

もう一つの「人の技を盗む」逸話を同じく博男を通して紹介しよう。

京都や何かに行くってえとねえ。職人さん、頭なんて、こうやとる。30分も1時間は、こうやとる。ハーッて、こうやってねえ。ハーッてあっち覗いてこっち覗いて、ほいでどういう形に雲は作ってあるのか、あー、あそこからああいう風に流れてきて、ああだねえ、吹き雲を吹くように。あっ、吹き雲をああいう風にながいて、あそからあそこの口から、波をああいう風にして、雲の上をあの一、被せるようにして作ってあるがな



あ。ハーッと下から見ると、成る程、この雲の所へ岩の処へちゃんと波が被さってくるように作ってある。

ほういうのをねえ、上回って、裏の方へ回ったり、下の方へ。ほんで普通の人間が見ると、あや—どういふ人間かしらんと思うわなあ。本人は一生懸命でやとる。ほいで気に入るとねえ。ほやあ、あそこのお寺へまた一回行きたい。もう一回、お寺へ行きたいじゃあねえだ。鬼を見に行きたいだー。

第二次鬼作を始めて、作次郎と博男は一緒にやってきたわけだが、20歳から始めた博男が一人立ちしたのは43歳頃であったという。博男は「それまで親に甘えすぎた」と言いつつ、「もっと早くから図面を引くべきだった」と反省をしている。鬼板師の独立はこの「図面を引くこと」にある事がこれから良くわかる。

ほいでも、どうだな、親父さんが、「まあ、おらあかんでなあ、まあやれんでなあ、手が目が見えんようになって来たし、手は震えて来たしねえ。まあ、おらあ、まあ、ようやらんでなあ」ってなってって、ほれからだねえ、まあ、何時までも親父さんに頼っちゃあいかんで一ってって、ほれから、もう図面も引くようになって……

親父さんの描いてくれた古いやつを持って来て、ほいつを見てほいつを手本にして、ほんで手本を見て、あー、ほうか、こうしてやらにや。ほんでやるようになる。あー、そういえば、親父さんがこうやってやとったなー、こうやって直いとった、直いてくれたな一っていうことを思いだしてねえ。

このように作次郎が退いて初めて、博男は、第二代鬼作になったのであった。ただ作次郎は80歳の頃まで、仕事はしていたのである。92歳で作次郎は亡くなっている。(第3図及び第4図参照)

昭和43年に独立した博男は父、作次郎と入れ替わり、鬼作を経営していくことになった。それから5年後に弟の節夫が鬼作へ入り、以後、博男と節夫の2人による鬼作が始まったのである。節夫が27歳、昭和48年のことである。そして現在に至るまで同じ体制で来ている。2人は兄弟とはいえ、20歳年が離れており、初めて会った時は節夫が博男の息子のような感じがしたものである。その節夫が三代目鬼作である。杉浦節夫は昭和21年(1946)に作次郎49歳の子として生まれている。



第3図  
第二代鬼作 杉浦博男  
仕事場で鬼瓦製作中



第4図  
数珠掛鬼面又ギ  
杉浦博男作

親父さんが建てた建物は一つも残ってないでねー。全部建て替えたで。昔は配置、全然違うでねえ。まあ、面積は一緒だけんど。

僕（節夫）が覚えがある時は、男の人2人に女の人が、手伝いに来とった人が2人ぐらいじゃあないかなあー。ほれに、兄いー、兄貴と親父さんとだと思う。

節夫は刈谷高校を卒業すると、一年浪人生活を送り、二年目は鬼作で手伝いをし、次に二年間、専門学校へ行っている。その後、愛知マツダで五年間、巡回サービスや営業を担当している。実際に鬼作へ入ったのは節夫が27歳の時であった。第一次オイルショック（1973年）

の頃である。節夫は鬼作へ入ると、以後ずっと、販売を中心に仕事をして来ている。鬼瓦は博男たちが生産し、瓦を他の瓦屋から仕入れ、鬼瓦と瓦を一組にして販売していたという。

まあ、工事屋さん、また製造してみえるところ、ほういうとこだけ回ればいいもんだん。ほんとに、営業としては楽だったけどー。ずうっと殆ど瓦の販売を僕は主でやっただもんだん。

元々車の営業をやっていて、全部、色々なところを回っていた頃に比べると、瓦屋は業者が限られており、その分、楽だったという。

それで、雑益をずうっと。瓦を……じゃなくて、鬼、窯を積んだり、配達したり。ほれから、もちろん集金だとか、ほういうこと全部やっていたからねえ。

戦後、作次郎の代から瓦と鬼瓦のセット販売をやって来たのだが、20年前頃から黒瓦のトンネル窯が出来たことによって、瓦屋自身が生産だけでなく、直に瓦を販売するようになり、鬼作でやっていた瓦の販売は徐々に無くなっていったという<sup>1)</sup>。このように節夫は営業を中心に鬼作で博男との分業体制をとって来たのである。なかでも「一番苦労したのは金だよ」と言っている。

ほやまあ、回収の問題があるしさー。瓦扱えば扱うほど、金額は増えてくるし。ほいで矢っ張り、右から左には貰えないし。矢っ張り、寝る金額が増えてくるし。そういう事が、あれだねえ。まあ、あの頃、右肩上がりの時だったで、ほんとうに入ってからちいとの間はすごい勢いで伸びたでねえ。まあ、ほんだけど、良かったのか、悪かったのかと思うと、わからんなあ。

現在は瓦の販売はほとんどなく、手造りの鬼瓦が中心になって来ている。手造りの鬼瓦というと、最近ではハウスメーカーによる平板瓦が民間用に大量に出回るので、和瓦の堂宮を中心にした鬼瓦の生産を想定してしまう。ところが、鬼作では民間用の手造り鬼瓦を主体に生産している。その理由を節夫は話してくれた。

僕は、みんな、お寺やったで、僕はお寺、まあ、あんまり力入れなかった。どっちかって言うとお寺<sup>うち</sup>の場合は、東のほうにお得意さんが多かったもんで。東の方っていうのは、元来、お寺の数も少ないしねえ。西と比べりゃ、は一るかに少ない。

だから、一番忙しかった時っていうのは、ちょうどあれは、えーと、筑波に学園都市が出来た頃に。何も無いところに、あれだけの物を作ったんでー。ほこに相当の金が落ちて、ほいで大きいもんが建って……

それ故、鬼作は手造りの民間用の鬼瓦に特化しているのである。最近では平板瓦の需要拡大に和瓦が押されていることもあり、同業者に買ってもらう方が多くなって来ているという。民間用和瓦の鬼瓦が主にプレス生産される現代、手造りの民間用鬼瓦の存在は逆にユニークな特徴を持っていると言えよう。

節夫は「鬼作」を越えて三州の鬼瓦屋全体に対して重大な貢献をしている。『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』が平成12年6月に発行されている。三州鬼瓦製造組合と三州鬼瓦白地製造組合、つまり、黒地と白地の鬼瓦組合が共同して制作している。このカタログによって、それまで部外者には見る事の出来なかった三州鬼瓦の全体像が浮かび上がって来たのである。それまでは三州の各々の鬼板屋が持つかなり限られた品目の中からそれぞれの得意先が鬼瓦を注文し、鬼瓦は日本各地へと動いて行っていた。ところが、この2000年度版総合カタログの登場によって、顧客は一気に一鬼板屋から三州鬼瓦の宇宙へと投げ込まれることになったのである。三州鬼瓦の世界における「鬼瓦のビッグ・バン」である。

これによって逆に生産者である各鬼板屋に何が起こるかという、それぞれの鬼板屋はカタログにある全ての製品を自ら生産することは事実上不可能なことなので、各鬼板屋の力量に合った鬼瓦を定め、他の鬼板屋との差別化を図り、見栄えがして、ユニークで、経済的な鬼瓦を作らざるを得ない。さらに、各鬼板屋の得意先からカタログを通して注文された鬼瓦が他の鬼板屋の鬼であった場合、同業者間の融通が発生してくる。つまり、一方では各鬼板屋で鬼瓦の錬磨が起こり、新製品の開発が進む。また他方では、各鬼板屋は互いに各自の鬼瓦を注文に応じて融通し合うことによって単なる競争から共存・共栄・協調の道を選ばざるを得なくなる。総体的にいうと、鬼板屋全体の活性化に繋がっていく。別の言葉で表現すれば、それまでバラバラだった鬼板屋の世界が、ジグソーパズルをひっくり返していた状態から「三州鬼瓦」という明白な全体像を形成したことになる。取りあえず、2000年度の全体像がまとまったわけである。その各パーツは活性化によってより変化を加速化させることが予想されるため、何年かごとのバージョン・アップは必要である。

これまで三州鬼瓦組合で誰も成し遂げた事のない大事業と斬新なアイデアをもたらした人物が、1999年4月から2001年3月まで三州鬼瓦製造組合の組合長を務めた杉浦節夫だったのである。節夫は「総合カタログ」のアイデアを前々から心に抱いていたという。節夫の構想は実現化した『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』よりももっと雄大で、鬼瓦だけでなく、瓦まで全部入れた総合カタログをイメージしていたのであった。これは瓦組合からの賛

同を得ることが出来ず、鬼瓦だけのカタログになった次第である。節夫は自分が長年温めてきた考えを1999年4月、三州鬼瓦製造組合組合長就任の挨拶で自らの抱負として、組合員の前で語り、具体的な目標を「三州瓦の総合カタログ」の完成としたのである。節夫は次のように語っている。

1万円かかっても良いで、全国の業者がこいつを一冊見れば、もう三州の瓦が全部分かるってようなもんをほんとは作りたかった。ほんとはほういう事をしたかったんだけど、ま、取りあえず鬼瓦だけって事で。

白地組合がこの黒地組合から出た節夫の案に同意し、協力体制を採ったことも、大きな変化であった。

まあ、言ってみれば敵同士っていう感覚はおかしいけど、あんまり付き合いがないのが、そんな初めてじゃないのかなあ。二つの組合で。ほやあ、もちろん両組合入るとる人も結構いるけど。うーん、その二つの組合で、揃って一つの事業をやったて事は初めてじゃーないかなあ。

白地組合にも中心となる人物が現れ、それが、当時の組合長の「大でんちこ」さんこと神谷保男であった。

ほんときは、大でんちこさんがやったんだけどねえ。あの一、ほの子がまた太っ腹の子でねえ。ビックリしたよー。ようやってくれてねえ。

三州鬼瓦総合カタログの完成によって何がはっきりして来たかと言えば、鬼瓦と鬼瓦組合の独自性であろう。鬼瓦は瓦の特殊もの、付属品といった感覚・思い込みを明白に払拭することに成功したのである。鬼瓦組合の結束力が改めて浮き彫りにされたと言えよう。その背後には特に阪神淡路大震災以降、瓦の需要の大きな変化と、長引く不況に対する鬼瓦屋の危機感が存在するのは否定できない。節夫の世紀の変わり目における組合長として行った大事業は三州鬼瓦の世界を一変させる力を秘めていると思われる。

## まとめ

神谷春義系と岩月仙太郎系について、事実上、二つに分けて記述してきた。この系列を描写することで見えてきたのは、確かに、現実には鬼源系と鬼仙系の二つに分かれた形になって

はいるが、鬼板の技術と流儀において、おおもとは一つであり、岩月仙太郎に全て収束すると言って良い。遠州の鬼板の流儀である。ただ、たまたま、弟子の神谷春義が先に高浜へ鬼板の修行から早く帰り、岩月仙太郎の鬼板の流儀を初めて高浜へ伝え広めたのである。親方の仙太郎は弟子の春義よりも何年か遅れて高浜へ戻り鬼板屋を始めたという事実である。この親方と弟子との高浜における鬼板屋開業の時間的なずれが元祖についての認識を複雑にしているのである。

ここでは神谷春義系、岩月仙太郎系の二つのグループとして実態に合うように記述したのである。ところで、神谷春義・岩月仙太郎系のもたらした鬼板に関する貢献の中に、自己の系列を越えて三州鬼瓦全体にまで影響を及ぼしたものがある。「石膏型の導入」である。神谷勝義による「丸型」と、杉浦作次郎による「一つ型」であり、どちらも瀬戸窯業学校を通して学んだ、陶彫の世界で置き物を作る際の「型起こし」技術の応用である。現在では全ての鬼板屋にまで浸透している技術である。ただあまりにも鬼瓦の石膏型と、陶彫の世界の石膏型とは形態においてかけ離れたものになっているので、別物のように見えがちである。しかし、この陶彫の技術は1920年代から鬼師の世界に伝わり、鬼板師の世界で独自に今日まで発展してきたと言える。

もう一つの流派を越える革新が、杉浦節夫の「総合カタログ」による三州鬼瓦の全体像の形成と、各鬼板屋間のネットワークの形成であろう。石膏型の導入をハードの分野における革新とすれば、総合カタログの導入はソフトの分野における革新である。一鬼板屋における商品カタログと違い、その効果は絶大なものがあると考えられる。

最後に、神谷春義・岩月仙太郎系の特徴を述べてみたい。何といても目を引くのは、窯業学校を卒業した鬼板師をこのグループから4人輩出していることであろう。第二代鬼源の神谷勝義が瀬戸窯業学校を、初代鬼作の杉浦作次郎が同じく瀬戸窯業学校を、第二代上鬼栄の神谷知佳次が常滑窯業学校を、第三代鬼長の浅井邦彦が常滑窯業学校をそれぞれ出ている。神谷勝義、杉浦作次郎、神谷知佳次の三人は石膏型の技術を鬼師の世界へ普及させている。浅井邦彦は石膏型からさらに進めて、プレス機械と金型による鬼瓦の量産化に踏み切っている。このように、鬼源・鬼仙系は総じていうと、黒地の鬼師の世界において、鬼瓦製造技術の近代化・合理化を他に先駆けて積極的に行い、鬼瓦の量産化に成功し、他系列の鬼師に多大な影響を及ぼして来たと言えよう。

## 注

- 1) 黒瓦のトンネル窯を三州で最初につくったのは野安製瓦株式会社である。昭和54年4月に新しい黒瓦（黒瓦）と銘打って新しいトンネル窯を築いている。

## 参考文献

- 石田高子 1983年『甕のうた』愛知県陶器瓦工業組合.
- 駒井鋼之助 1963年『粘土瓦読本』彰国社.
- 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合.
- 吹田市立博物館 1997年『達磨窯』吹田市立博物館.
- 杉浦茂春編 1982年『高浜市誌資料(六)』高浜市.
- 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会.
- 高原隆 2002年「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247.
- 2003年a「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(1)—」『文明21』第10号：163-189.
- 2003年b「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(2)—」『文明21』第11号：81-132.
- 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)—」『文明21』第12号：113-165.
- 山下晋司, 船曳健夫編 1998年『文化人類学キーワード』有斐閣.
- ONIX 1992年『鬼瓦総合カタログ』ONIX.